

東西と一ざい

舞台技術オペレーターの

新しいかたち

「二足の草鞋」

滋賀県・小野 隆浩



この春、びわ湖ホールでオペラ『ばらの騎士』が上演された。2020年に無観客上演として配信された『びわ湖リング・神々の黄昏』以来、コロナ禍の中でも簡易な舞台装置を使ったセミステージ形式として3本のオペラを続けてきたが、やっとマスク無しの通常の公演が戻ってきた。4年間にわたる『びわ湖リング』では、新しい舞台表現の可能性として「プロジェクションマッピング」を多用し、そのノウハウも蓄積してきた。今回の『ばらの騎士』でも同様に映像を

使ったが、今までのマッピングとは違うやり方を試した。映像のプロジェクションと言えば舞台全体に映像を投影し、舞台上に違う世界を作り上げるやり方がほとんどだが、今回はあくまでも「舞台装置の一部」として映像を使っている。(写真1)の舞台装置の壁には、ベニヤ板を切り抜いた「飾りのレリーフ」がつけられているが、このレリーフ部分だけと壁面に映像を投影する、まさに「マッピング」である。レリーフを目立たせたい場合は、今までは照明を当てるかレリーフの色自体を調整していたが、映像を使うと色そのものや輝度も変えることができるし、壁面も(写真2)のように大理石模様を描いたり古い壁のように蔦を這わせることもできる。レリーフぴったりの映像を作るのが大変なような気もするが、実は舞台装置を製作する際のCADデータをそのまま流用しているだけとの事であった。



写真1



写真2

また、今回はちょっとしたギミックも仕掛けられている。1幕に元帥夫人の歌うアリアがあるが、若く美しかった昔を懐かしみ変わってしまった今を嘆く内容の歌に合わせ、壁にかかっている夫人の肖像画が(写真3)から(写真4)へとゆっくりと変化していくという仕掛けである。この絵は若かったころの肖像画と、未来の肖像画の2枚を製作したのかと思っていたが、何とこれは生成AIを使って描いている

とのこと。大まかなイメージで若かったころの肖像画をAIに描かせ、別の年齢を入力すると自動的に年を重ねた絵が生成されるとのことだ。



写真3



写真4

今回の映像を手掛けているのが、音楽系の映像制作や配信等を行っている「アライ音楽企画」代表の新井氏。彼の会社にいるメンバーは一風変わった学歴を持っている。新井氏自身もそうだが、全員が音楽大学や芸術大学でクラシック音楽やジャズを専攻した「音楽家」で、一方で演奏活動や研究(練習)活動もしており、古い表現だと「二足の草鞋を履いている」状態になる。音楽を深く理解した上で、音楽家のための舞台技術ということが彼らのモットーで、今

回のアシスタントの映像オペレーターも声楽科出身とのことであった。映像を出すための「GOボタン」を押す際にも、音楽に合わせて「ちょっと拍を食って入る」ことや「ゆっくりとritしながらのフェードアウト」といったように、言葉では説明しきれない「非常に音楽的なオペレート」をしていたのが印象に残った。

以前は「二足の草鞋」という言い方は、舞台の世界では「専門性に欠ける」という批判的・揶揄的な意味も含んでいたと思うが、このような「素晴らしい二足の草鞋」もあることを実感した。

(大阪芸術大学

びわ湖ホール)

事故の話

岐阜県・熊野 大輔



これまでの人生で一度だけ、動いている自動車に生身でぶつかったことがあります。20年以上前の話です。22時過ぎ、劇場を出てすぐの横断歩道で、

たぶん信号は点滅する段階にありました。渡っていたところ、すぐ後ろを歩いていた舞台監督の話によれば、私が「突然右に高速でスライドしていった」とのことです。車から降りてきたのは若いカップルでした。旅行かデートの帰り道だったのではないのでしょうか。彼らにしてみれば、社会的にこれといって役に立たない男をはねて、楽しい雰囲気をつぶしてしまっただけの気の毒なことです。このときの記憶はかなりあいまいなのですが、少し離れたところで「ここにいてもしょうがないから、みんな帰りましょう」と制作スタッフが声をかけているのが聞こえたことは覚えています。舞台監督の話では、私は倒れた状態で「おやおや」と言っていたそうです。誰も警察を呼んでくれなかったようなので(運転手にしてみれば運のよいことでした)、ぶつかった車に乗せられて近くの病院に向かいました。頭も打っていないし、骨も折れていなかったのも、湿布を渡されて家に送り届けてもらいました。すでに日付が変わっていたし疲れていたのですが、寝ようと思ったのですが、このタイミングで痛みがやっ

て来ました。おかげでたいへん眠りの浅い一夜でした。痛みは数日で引いて、とくに体の異常もありませんでしたが、しばらくは横断歩道を渡るのが怖かったです。

幸いその後は交通事故にあうことも、事故を起こすこともなく過ごしています。この先は私の勤務先で目撃した事故の話です。

今年の1月のとある午後、休館日に当番出勤して外作業をしていたら、外壁工事に来てもらっていた現場責任者のWさんが事故を教えてくださいました。向かってみると自動車が1台、角の縁石も歩道も乗り越えて、敷地内で止まっていた。さいわい工事の足場があったため、建物に被害はありませんでしたが、足場と外灯が折れていました。相当なスピードを出していたので、事故の起きるイメージのわからない場所だったので驚きました。こちらが関わることではないので、あとは警察と保険会社と市に任せて帰りました。

3月のとある午後、巡回をしていた施設管理職員から「ちょっと見て来いよ」と言われて向かったところ、1月と同じ場所で自動車が横転して

いました。工事責任者のWさんが困った顔をしていました。相当なスピードを出していたので、自動車を除いて被害がなかったのが、完全に他人事ですが、「そんなに見通しの悪い角なのかなあ」と不思議な気持ちでした。

4月のとある夜、ホール行事を終えて事務所に戻ったところ、施設管理職員と夜間警備員がなにもやら話し込んでいました。職員は私の顔を見ると、「ちょっと見て来いよ」。例の場所はすでにパトカーや何やらが大勢たかっていた上に暗いので近づくのは遠慮して、角から少し離れた場所から覗いたところ、果たして1月と同じ角度で自動車が、今度は再び足場をへし折って止まっていた。折れた外灯はすでに取り除いてあり、取り付け工事前だったおかげでセーフでした。遠目にWさんとおぼしき姿が見えました。

交差点を渡ってすぐの角でなぜこんなにスピードを出さねばならないのか、小心者の私には考えの及ばないところですが、岐阜県では普通の事なのではないでしょうか。そういえば信号待ちをしていると、隣の車線の自動車が少しずつ前進し、信号が青に変わるころに

は横断歩道を完全にふさいでいることがしばしばあります。動き出してしまえば簡単に達する距離をなぜ赤信号の内に前進しなければならないのか、やはり私の想像力の埒外にあります。願わくば私と家族が横断歩道を渡る際に、かかる運転をする自動車に遭遇しませんように。

女性の働き方について

東京都・坂口 野花



最近関わった仕事に、青年劇場の作 篠原久美子、演出 五戸真理枝の『マクベスの妻と呼ばれた女』があります。台本を読んだ印象ではミュージカルの要素があると感じました。マクベス夫人に女中頭があなたのお名前は？と問うところのやり取りは特にそう感じたので、ラップでやったらどうかと演出に提案。いいですねえとのお答えを頂いたので、リズムを刻んだラップの曲を作るとそれに役者の方々もノリノリで演ってくれ

ました。

劇中、急なお客様に対応する厨房ではあちこちで調理をする音をなんか楽器のようなもので表現出来ないか？と演出の方から提案され、マラカスやウッドブロックを使ったりリズムを左→右に振ったものを作る。ラップもこのMEもイメージに近いサンプリング音源から楽器を替えたり、不要なリズムをカットしたりテンポを調整して使用。他にも五戸さんの「ちょっと思いついちゃったんですけど～」にはとてもユーモアのあるアイデアが沢山あり、刺激を受けて愉しく関わる事が出来ました。マクベス夫人の本当の名前は何か？ 女である事で、個を殺している。結局は夫が殺人を犯す事に加担して、夫が亡くなると追従して死を選んでしまう夫人。こんな事がまかり通ってしまったら、今後女性は囚われの身から脱却できない。女中たちはマクベス夫人は狂い死にした事にするという。ここでの女中たちは戦争を起こさせないように画策したり、とにかく大活躍する話になっている。

先日の『女性だけの座談会』に参加して、音響女子が責任ある仕事を任される年代に結

婚や出産の時期を迎え、仕事か結婚か悩める方が沢山いるという事に驚きました。仕事を続けたいのに子供が出来たら、現場は厳しいとか、これって安心して仕事が続けられる環境が整ったら出来るという事ですが、その為にはベビシッターさんか必要だったり、本番を交代で出来るような体制、子育て期間中にも何かしらの仕事が続けられるようにする事やご家族の協力が必要だったりします。現実には音響女子の存在が多くなって来ている現在、何かしらの手を打たないと、人手不足になるのは目に見えています。

看護師さんなどは院内に託児所があったり、子供が3歳までは1日6時間勤務を常勤扱いにする育児短時間勤務制度があったりするようです。音響の仕事は劇場入りすると、時間の拘束が長く1日12時間拘束される事もよくある事なので、同じ事が出来るかどうかわかりませんが、何かしらの環境が整ってくる事を願っています。

座談会のメンバーの中に子育てを続けながら音響を続けている方もおられたのは今後の希望になっていく、そして声を上げる事は次につなが

てくると感じました。

(東京演劇音響研究所)

麗しのピクニック

東京都・鈴木 三枝子



ピクニックに最高のシーズンがやってきた。

美しい新緑、寒くも暑くもない空気、そしてまだ蚊に刺されることもないこの季節。この一瞬の煌めきを、余すことなく満喫するため、暇さえあればピクニックに行く。

家にはピクニック専用バックが常備してある。生地が厚く、四隅がペグで固定できるレジャーシート。空気膨らむアウトドア用枕。そして薄めのブランケット。思い立ったらこのバックと文庫本を持ち、コンビニで飲み物とお弁当を買えば、ソロピクニックに旅立てる。徒歩10分の芝生がある公園へ。

ソロキャンプに憧れた。憧れたけど、自分には無理なことはわかっていた。アウトドア技術はないし、車もないし、キャンプ用品もない。その上

ソロだなんて、キャンプなめんなよ、という誰かの声が今にも聞こえてきそう。でもでも、休みができたならふらっとキャンプに行く、なんて人の話を聞くと、羨ましくて羨ましくて仕方がなかった。

考える。なぜ私はソロキャンプがしたいのか？ まずはソロ部分から。一人で行くということは、人を探したり、スケジュールを合わせたりする手間が省ける。時間の上でかなり自由ということだ。これは私の場合、旅行などでも適用される思考なので、割と自然なことである。次にキャンプ部分。何故にアウトドアと無縁な私がキャンプに行きたいのか？ それはまったく陳腐な理由である。自然の中に入り込みたいからだ。

もう少し若いころは、そんなこと思いもしなかった。生活に自然を感じなくても、どこまでも頑張り続けられた。けれど年を重ねるにつれ、どうにも時々息苦しくなる時があって、ああ、森の中を歩きたい、海をぼーっと眺めたい、と、自然の中にいる自分を妄想するようになった。きっと人はそれぞれエネル

ギーチャージする場所や事柄があって、今の私は「自然」なのだと思う。

そして私の求めるものは「自然に入り込む」である。例えば、緑豊かな場所に温泉旅行に行く、というのとは少し違う。自然を鑑賞したいのではなく、その中に入りたいたのだ。だからこそこのキャンプなのだ。けれどそのハードルはどこまでも高い。悶々と過ごす中、ある日突然ひらめいた。そう、ソロピクニックを！本気の自然ではないかもしれないけれど、ひとまずそこから始めてみよう。

まずは100均のレジャーシートから始まった私のピクニック。グーグルマップであたりを付けておいた公園におずおずと向かう。一人でピクニックなんて相当痛い感じがするので、人が少なさそうな平日の午前中を狙ってみた。

広くはない公園だが芝生と木々がある。都会の中の小さな人工の森。思った通り人は少ないのだが、逆にどこにシートを広げればいいのか迷いに迷う。のんびりしている人が少ないだけで、犬の散歩する人や、ショートカット道として使っているサラリーマ

ンもいて、どこにシートを敷けばお邪魔にならないか、いや奇異の目で見られないか、自意識過剰が過ぎるほど、迷いに迷う。

えいやっ、と勇気を振り絞って、ここと決めた場所にシートを敷き、ひとまず座る。あ、地面で硬いんだ。ふさふさの芝生ではないので、地面のゴツゴツがペラペラのレジャーシートから肌に伝わる。ピクニック慣れしている人を装うため、すぐさま本を取り出して読み始める。ピクニック慣れしている人が本を読むかはわからないけど。

天気は良く、すこぶる青空。でもじっとしていると5月でも風がひんやりしていて少し寒いくらい。歩いている時、風は感じていなかった。でも空気は常に動いている。しばし本を読んだふりをして、だいたいこの場所になじんできたので、ピクニックの一大イベント、お弁当の時間に移行する。記念すべき初ピクニックなので、ちょっと高級スーパーの成城石井で買ってきた。

外で食べるお弁当は、恐らく3割増しで美味しい。子供の頃の運動会や遠足などの記憶が喚起されるからかもしれ

ないし、太陽の照明が素晴らしいのかもしれない。もしくは草や木の香りがエッセンスになるのかも。理由はともかく、とにかく美味しく感じる。レジャーシートの上を、一生懸命に蟻が歩いている。米粒一つ置いてみたが、彼は気づかず通り過ぎてしまった。

ご飯を食べ終わり、ぼんやりする。もう人の目も気にならなくなるくらい落ち着いたので、本格的にぼんやりする。

しかし、いやに情報量が多い。風にそよぐ木の葉の揺らめきだとか、その揺らめきによってうまれる日光の煌めきだとか。鳥の声だとか、草の匂いだとか。空に浮かぶ雲が刻一刻とその姿を変える様とか。

ぼんやりすればするほど、その情報量の多さに驚く。その気づきが増えていくことがとても嬉しくなる。ふだん気付かず過ごしてきたそれらのことを、今は体感できることがとても豊かに感じる。

それから3年、飽くことなく続けている。いつも同じ公園。けれど、毎回違う自然。今年はようやく桜の時期に行けた。今では枕持参で、本気で昼寝ができるほどのピク

ニック玄人になったと思う。
幸せの、麗しのピクニック。
(Ivy Cricket)

ミュージカル音響システムの 変遷（再生機編）

神奈川県・千葉 治朗



皆さまおはようございます。
劇団四季の千葉治朗です。

僕は主にミュージカル音響を始めてから40年になります。現在担当している劇団四季ミュージカルCATSは1983年の11月11日に開幕し、去年日本での上演40周年になりました。僕は四季に入団して5年目の1990年、CATS福岡公演(7ヶ月のロングラン)で音響チーフを担当しました。それから34年が過ぎ、現在またCATSの現場を現役で担当している自分にちょっと驚いています。CATSの音響システムもこの40年間で、音響機材の発展と共に進化してきました。

劇団四季ミュージカルでは、音楽は生オケとカラオケ音源再生の両方ともやりますが、

CATSは初演からずっとカラオケ音源再生で公演を行なっています。初演時は1/2インチ、8chアナログテープ再生でした。1988年頃から1インチ16chアナログテープ(OTARI MX70)を使用し、ノイズリダクションにdbxを通した再生方法に変わりました。2003年頃からFOSTEX2424ハードディスク再生に、2022年からは現在のTASCAM DA6400 32ch96k SSD再生で公演しています。個人的な感想ですが、現在デジタル96k再生していても、昔のアナログテープ再生の方が、豊かな音が出ていたなと感じています。でもトラブルや事故はテープの方が圧倒的に多かったと思います。スタートしない、止まらない(テープにセンシングを貼って止めていたため)、またリールのかけ間違いという恐ろしい出来事も。テープ再生速度が不安定になりピッチが変わってしまったこともありました。これはシンガーに大変申し訳なかったと、今でも悔やまれるところです。ハードディスク再生に変わってからは、導入初期の頃ですが、フリーズや再生音が同じ箇所をループしてしまうなどのトラブルが多発しました。現在稼

働しているSSD再生は比較的安定しています。

最近、音源はデジタルなので、Pro Toolsで簡単に編集できますが、テープ時代を知っている世代は編集作業で本当に苦労しましたね。今ではほとんどなくなりましたが、何日も徹夜で編集することもありました。2インチ24chのアナログマスターテープからトラックダウンする時は、まずテープレコーダーでリファレンステープ再生して調整しなければなりません。そしてトラックダウンしたテープから、本番テープを作るために、デルマで音頭に印をつける、切る、繋げる、白身を入れる、白身にナンバー名を書く、センシングを貼るなど、アナログテープを知らない世代は想像もできない大変な作業でした。劇団四季にPro Toolsが導入されたのが2001年頃だったと思いますが、それまではアナログテープの編集作業をやっていたことになります。当時は本当につらい作業だったけれど、今はいい思い出です。

これから30年後にはどうなっているのかな、AIロボットがCATSの仕事をやっているかもしれませんね。音響オペレーターという職業は無く

なっているかもしれませんね。それはちょっと寂しい気もしますが。

30年後、劇団四季は創立100年になります。

それではまた。

(劇団四季音響部)

ところ(機材) 変われば

神奈川県・千葉 真理子



皆さま、おはようございます。劇団四季の千葉真理子です。

桜の可愛いピンクの景色から、清々しい青々した新緑の季節となってきました。そしてお花はつつじが見頃になっていますね。さてそんな季節の私の今の職場は、観光客がものすごく多い、いわゆる有名な観光地です。本当にすごい賑わいで、人、人、人で溢れかえっています。それも外人さんばかり。駅の改札口はもちろん、ホテルや町の至る所で耳にするのは外国語。地下鉄に乗って駅に入ると、ホームに待っている方はどうみても外人さんば

かり。多分90%ぐらいの確率でいらっしゃることでしょう。残りの10%は日本人として、でもその人達も観光客かもしれない・・・かく言う私も地元民じゃありませんから。さて一体ここはどこ国なのでしょう？なんて思う毎日の出勤でした。劇場の音響さんに聞いたら、「外には出ません、窓から眺めています」と。ケイザイコウカ等色々あるかと思いますが、ちょっと考えてしまいますね。

さて、そんな私の現在の担当公演とは、東京の劇場から引き続きやっている演目ですが、特記事項としてメインスピーカーを変更しました。と言うか、東京では劇場常設スピーカーを使い、今回から全国ツアーに対応したものを使うことになったのです。

劇場が変わるのに、その上機材まで変わるのは大変です。メインスピーカーですからね、オーケストラが別物になりました(笑)。スピーカー個々の特性がありますから、一概に良いとか悪いとか決めつけられません。好みもありますし、「この作品に合っている」とかなら表現できるかもしれません。

今回の変更したスピーカー

から実際に出る音は、分離が良く楽器の音もクリアに聞こえます。舞台上の役者さん達も聞きやすくなったと高評価で、オーケストラが聞こえないという苦情(涙)も無くなりました。舞台上のモニターシステムは東京の劇場と変わっていないのですが、劇場空間とメインスピーカーが変わったことで、役者さん達の聞こえ方が良い方向へ向かったことと思われます。ワイヤレスマイクの音も抜けが良く、25本以上のマイクが一気に上がっても、ぐしゃぐしゃになりません。コーラスも綺麗なら綺麗に聞こえます。それなりならそれなりに聞こえます、ハイ。つまり出た音を素直に表現してくれるのです。でも、それって、ごまかしが効かない?!と言うことですね。

劇場の響きがとても重要で、お客さまが良ければ役者さんも大体良いと感じることとなります(となることが多いです)。そして、PA席での自分の音のモニターも大きなポイントで、そのやり易さやり辛さがそのまま音に出てしまいます。やり辛いままやっていると、気になってしまい集中力に欠けてしまい、そして…「あー、やばいー」ってなこ

とに陥ることも、あるやらないやら。とにかくやり易い状況に早く持って行くことが、その日の公演の(音響の)出来にかかっています。大体1曲目は様子見ですが、ミュージカルというものは最初に忙しい場面が多いですからね(ちびソロが多いとか)。調整する間も無く次々やってくる段取りごと。やっと落ち着いたと思ったら、もう大分話が進んだ1幕も後半だったりして。

まあどんな状況でも、最高の音を提供するのがプロなのだよ!とは解っていますが、まだまだ未熟者ですから、AIではなく人間がやることですから、どんな時もありますよね。その日その時で、自分のやれる限りのことを試みることです(と、偉そうに語ってみました…ああ恥ずかしい)。

では今回はこの辺で。季節が一気に夏に向かっていようで紫外線攻撃が怖いです。皆様もどうかご自愛を。

(劇団四季音響部)

ロートタムという楽器

神奈川県・常松 明



皆さまはじめまして、ではないのですが、4年前から東京・飯田橋のライブハウス『スペースウィズ』で音響顧問を担当させていただいております常松と申します。

ロートタムという楽器を知ったのは50年近く前になりますが、インスタントコーヒーのテレビコマーシャルでクラシックのパーカッショニスト吉原すみれさんが現代音楽の一節を演奏しているのを見たときだと思ひます。

その後、縁あって吉原すみれさんの楽器の運搬やセッティングを手伝わせていただくことになり、ロートタムという楽器を間近で見てきました。

ロートタムの特徴は、その独特の音色と共にリムを回すことで演奏中に音程を変えられる、ということです。

その音色故か、1980年代にはロックミュージックや国内

のポップスの世界でもロートタムを使うドラマーさんが何人か登場し、そのステージでのマイキングも見聞きして勉強させていただきました。

一方このところ、あちこちのライブハウスにロートタムを持ち込む友人や知人のドラマーさんたちが見せてくださる写真にとっても違和感を感じています。

現在タムのマイクはゼンハイザーのe604などクリップ型のもが主流になっていますが、クリップ型のマイクはタムのリムにクリップして使います。実はそのマイクをロートタムのリムにクリップするPAエンジニアがほとんどなのです。

リムにクリップでマイクを装着すると、リムを回して音程を変化させることができなくなります。ロートタムの特徴を理解していれば分かることですが、ドラマーさんにはタムのチューニングを固定しておくように指示するそうです。

ドラム用にクリップ型のマイクが登場するまで、タムのマイクはマイクスタンドでセットしていました。当時の写真を見ると分かるのですが、ロートタムは裏から狙う録り方が主流でした。

クリップではありませんから、リムを回して音程を変えることもできます。

この写真はリムのクリップの代わりにタムホルダーからマイクを固定した例です。この方法であれば、ロートタムの音程を変化させたいドラマーさんの創作意欲を削ぐこともありません。

舞台音響に携わる身として、楽器の本質に向き合って精進していきたいと思うと同時に、アーティストの意図を汲み取ってスムーズなコミュニケーションにつなげる一助になればと思い、投稿した次第です。

ライブ音楽の感情的効果 について

神奈川県・百合山 真人



スイスのチューリッヒ大学の研究チームが、2024年2月「なぜ人は録音よりもライブ演



奏で感動するのか」というテーマで論文を発表した。最近、時間があれば各地の音に関する論文を読んでいるのですが、その中でも特に関心を持ったこのテーマについて感想をまとめていきたいと思います。

ライブで聞く音楽は録音された音楽よりも強く感情を動かすことを示した研究であるが、どのような方法で実験検証していたのか。

研究チームは、楽しい感情と不快な感情を引き起こすことを目的とした30秒間のピアノ音楽12曲(否定的な6曲と肯定的な6曲)を作成した。これらの音楽を「ライブで演奏するバージョン」と「録音音源のバージョン」の両方を聴取した。参加者は磁気共鳴機能画像法(MRI)内で音楽を聴きながら、脳活動がモニタリングされた。参加者は、深い音楽教育を受けていない非ミュージシャンである。(図1)

実験の結果、否定的でも肯

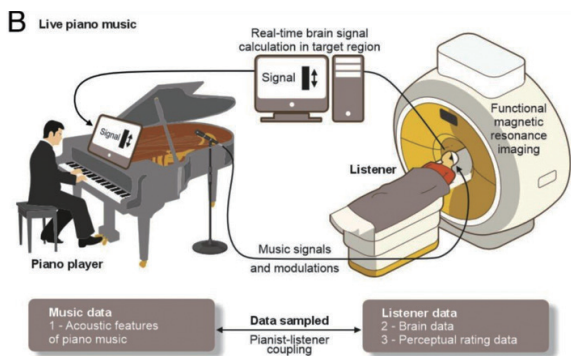


図1 モニタリングの方法

定的でも、ライブ演奏の音楽は一貫して脳の左側の扁桃体の活動を増加させた。左側の扁桃体は、音やその他の感覚刺激を特定の感情に関連づける役割があるという。対照的に、録音した音楽は左側の扁桃体での活動がはるかに少なく、不規則であった。これは、参加者が実験後に各音楽をどれだけ感動的だと評価したかと一致している。(図2)

ライブ演奏は、参加者には伝えられていない状態で、演奏者がリアルタイムで参加者

ダイナミックな結び付きを生み出し、音楽の感情的な影響を強化することを示唆した。

以上が実験の概要であるが、さてどのように演奏を調節していたのだろうか。

著者によると、「アーティキュレーションのバリエーション」「音密度の変化」「ダイナミックのバリエーション」の3つが挙げられた。

「アーティキュレーションのバリエーション」とは、音符がどのように演奏されるかを表し、表現力の尺度であると

考えられる。「音密度の変化」は、特定の単位時間内に演奏される音符の数を指し、曲の複雑さの尺度となる。「ダイナミックのバリエーション」は、音や音のエネルギーや音量を指す。

これらをまとめると、ライブ音楽パフォーマンスの順応性とダイナミックな性質が、より強力で一貫した感情的な反応を引き落とす可能性があるという。ライブ音楽は、より大きな体の動きを誘発し、聴衆の身体の覚醒と脳の状態を同期させ、録音された音楽よりも大幅にストレスとストレスホルモンを軽減し、ミュージシャンの脳とそれを聴いている聴衆の脳を結びつける。つまり、ライブ音楽が聴衆の反応に適応して演奏されると、実際に人間の脳活動を特異的に引き起こす可能性があるという概念を強調している。

音楽や効果音、台詞など音を扱う舞台音響家にとっても人ごとではなく、伝えるとは何か、なぜ人は感動するか、どのように動的に音を扱うのか、といったことを改めて言語化する必要があると感じる。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

(舞台音響家)

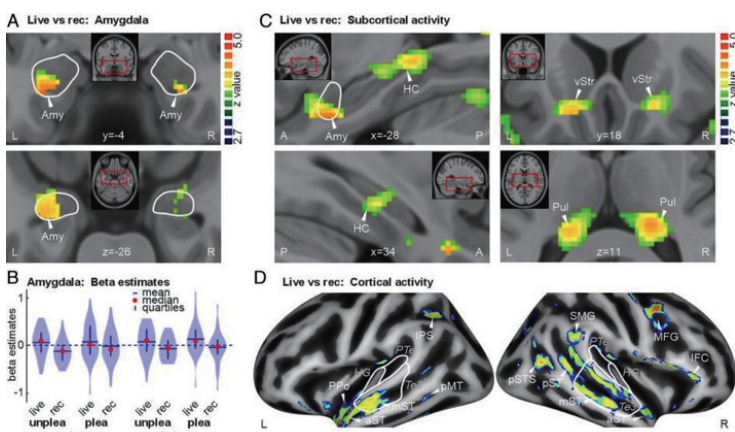


図2 脳活動の様子